

# 洛星新聞

発行所

ヴィアートル学園

洛星中学校

編集

洛星中学校

新聞部



## カレンダー

一頁目組 寺田明蔵

昭和二十七年も過ぎ、私達は昭和二十八年へとくらげをとし、芭蕉の云の「行きかう年も又旅人なり」と云う言葉の通り人生の旅を続けているのです。カレンダーは私達の行せざる物語るよりに、一枚くハラハラと散つてくれます。私はカレンダーが大好きです。特に外国の色づき厚紙のついたカレンダーは私の最も好む所のものです。何もかざりが好きなのではありません。私にはカレンダーの絵をよく味わいます。ふつうの二ヶ月もがらはつていろいろから、外国の色づきだといろいろ連想します。ちよつと絵はがきのように私達をその絵の中にくらさしてくれそうです。私は外国が好きです。世界名作でもしたしめませんがそれは主に人情のことだけで、風景はやはり絵はがきや、カレンダーで見ます。私がいたらないのかしらませんが、どうも図画でかいた風景より色づき厚紙の方がいいのです。特にこのごろマチスとか

ピカソとか、やれ野じゆつ派やれ何派等いつて、おかしな絵をかいしているのはあつちのものに近代化された今日では、自分のもつていゝる感情とか、そのものをうまくあらわすために、色々考えられて、最も高度な芸術品が作りあげられているのは、いつまでも昔にどまっていた進歩がないからではないかと思ひますが、しかし私は世界の風景を知る手がかりとしてカレンダーにきたいをよせているわけです。カレンダーが一枚々々めくられていくと、そんなことをいち／＼考えていると、私達はあせりを感ずるようです。決してそんなことはないが、かんがえなければ、若いのだしよつとがそれとものんきで死といふものを、遠い将来と考へがちなのだからでしょう。それがとつちかはわかりませんが私の小さい頃は、カレンダーを眺めながら世が流れいくのを目のあたりにかきえながら、心にこもりほどこきいなおもてをみせて、ち

つて行きます。カレンダーを人生にあてはめたら、世給人の人生にほるでしよう。しかしきれいにきかざつた世給人はいませんから、少し具合が悪いのです。私は実は何だろつかまよつていゝるんです。何にもたえなくていいかもしれません。

## 初参り B組 M.O

まが初参りに稲荷に行つた。こゝは日本でも、大変さいせんのがる所といわれている。商売の神様と云われ、参る人は参道をうすめ道がよこぎれない。五人のおまわりさんばせいにあつて、奥全はよになつていゝ。参道の両側には店がずらりと並び、客を待つていゝ。こゝは日本全国の人がお参りにくるのだから、行きちが人々のおちこちからお国のなまりがでるのばきこえる。各店にはせとものゝかざりものがよくみつけられる。これもなにかいみがあるのだらう。人にもまれあちこ



ちをみながら、本殿の前にでる。そこには直徑二メートルほどの大きなたるのさいせん入れがある。それけ正月三日のうちにうら一日で一ぱいになると思はれるが、もう四日だ。参る人もすくなく、なつたそうだが半分位だろ。そのさいせん入れを見てみると、拾円、その他百円が二三枚、それに五拾円がみられる。さいせんでその時代のくらしがわかるだろ。人はつぎからつぎへと續く。すぐ灰やがましい位になつてゐる。卑賤機をもつて記念さつえいをしてゐる人が多い。ここかの新聞社もきていた。「洛星新聞もよい時だねをほしいな」と思つた。それから奥の脱へ向つた。奥の脱への道は人をぬかせないほどのこんざつぶり、途中に迷信がいろいろにみえはした。それは「この茶わんで薬をのめば、どんな病氣でも必ずなをる」と云うのだ。この杯はものもつぎえてもよろしい。奥の脱についてみると、まだこれから奥にお参りする人が多かつた。

幻想  
日展を見

幻想といふ事は面白き言葉であり又おそろしい言葉でもある。なぜなら、ば良い幻想の場合については、人間といふ一つの物質を非常に汚はせるものであるが、反対に幻想の中に悪夢を見出すならば、それは人間にとつて非常におそろしい事である。しかしこれらのものは全部実現す

これについて一つの例をとつてみると、この同日展を見に行つた時の事である。確か日本画の八〇番に、池田述尊氏のであつたと記憶してゐるのであるが、「幻想の明神懸」という題の絵があつた。それは水の中ではなくはつした水底火山の幻想で、眞火に水中で火をふき出している。その異変で魚が死んでいたり、人魚になつたり魔界の中にたこがよれくになつたりしている。水中の悲慘はさまがうれて、よく新聞紙に出てゐる政治漫画とそれによく似ていた。私は「けく」とその絵を見つめたが、私のような絵の知識のないものに、その絵のとこがよいのか、わからない中にも一つの感動を覺出

したのである。何にしてもその絵に  
私が感動したのは確かだ。

この繪を見てゐると、おぞろしい  
ま物にぞもつかれたような憂持にな  
つて来た。幻想が私の意識の中で活  
動しはじめたのであらう。

次に幻想といふ事について考へて見よう。

例文は絵について考へてみると、  
幻想といふ吳では、自分の好きな自  
分の自由な作品が描かれるため、  
たがつて完成された作品も自由なの  
なのとした絵がなされるはずである  
これと同じように私達の生活にこ

この幻想を生活の中に与りこみ、  
有意義に使つたらどうか。私  
たちの生活が幻想と程の利用によつ  
てもつと楽しくもつと豊かなものに  
なるのではなからうか？

時計

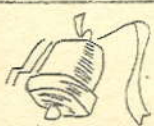
**時計**

時計にはたくさん  
 人の種類がありま  
 す。時計といふ  
 のはどれもこの  
 世の中になくてはならないものだとい  
 思います。この時計は電車のダイヤ  
 運転などにも用いられます。又、時  
 計は毎日々々のせいじな時間をあし  
 えてくれます。昔の人は日時計や水  
 時計等を使っていたの時間を知ってい  
 ましたが、いまの世の中ではせいじな  
 時計で、時間をはつきりわかるよ  
 うにしなくてはなりません。

漢の教の柱時計はまだ僕が生れる前からあつた時計なのでもうたいが古くなつています。だからよくすみません。けれども僕は時計が進んでゐる方がよいように思ひます。例へば十五分進んでゐたとします。すると僕は何時も七時五六分の京都行急行にのりますので、数分五十分に出来ればなりませんが、そうすると十五分進んでゐたらぬかとなく、進んでゐる方の時間にまに台はせようと思ふ氣が出て来ますので、進んでゐる方がよいと思ひます。そのかわり一つだけはせい確にしてあげます。それは何分すすんでゐるか、おくれでゐるか、わからぬ時にその時計をよくわかります。

このよきに時計は僕達の世の中で非常に大功なものではないでしょうか。一五組 本田 旭





# クリスマス

煙々と輝くシャンテリア、真赤に燃えるストーブ、取付けられた装飾、室内はさながらおとぎ話の世界のようなふんい気だ。舞台は僕達のクリスマス演芸会場。

刻々と開会時刻は迫る。暗やみの街には点々と家々の灯が静かに流れて遠くに丸物の航空燈台が夜空に光をばけかけている。空はどんよりと灰色におちつて、星はがすかにふるえている。ふと短い出がひろがってくる。僕のとこるへはじめてサンタクロースがきたのは、そうだ、終戦の年だ。つたから小学校に上る前の年だ。和子おばちゃん「戦争が終つて平和になつたから今年から良い子の所へサンタじいさんがおみやげをもつて来てくれますよ」と云つてくれた。そうするとその言葉の通りその年の二十四日の夜、サンタクロースのおじいさんがきてくれた。朝おきるとふと目にのびたのは雪灯に下つてくるまっ白いくつしただ。すぐあけて見ると、

ペンシルボツクスにエンゼルツツゴム、そしておいもをのびして色をつけて作つたかわいくなまめとくさぎのお菓子が入つていた。

その頃は食糧事情のわるい頃であつたし、僕にとつてははじめてのクリスマスでもあつたので、あいつもまんじゅうでも、今のデコレーションケーキのようにすばらしく思つた。そして翌年は欲はつてふしゼントのにくさん入るやうにと太くて底もかどともない父の軍足を引っぱり出してつうて大さわざをしたものだ。僕は正直なところ小学三年生まで、サンタクロースつてほんとにだれも知らないうちにこつたり来るものと思つていた。ところが三年生の時、となりの後子ちゃん「又明ちゃん、サンタクロースがくれはつたところぞえ、うちのあちやんがいうこはつた。うちのとあんなのと同じものが一つ入つていたやろ、あれお母ちゃんが大女さんを貰つて来たんやつて。アホラシー」と云うので僕は家へかけこんで母にきいた。すると母は「そんなにサンタクロースじいさんをつたがうのだつたら、もう来年からは来て下さらないかもしれまんよ」とい

つたので、僕は太あわて「ううん、うたごつてへん、又来年もいれてや」といふた。しかしそのあくる年からはクリスマスプレゼントといふ名前前の袋入のお金になつてしまつた。……などと冥想にふけつてみると、ようやく押山先生が出てこられて、演芸も始められ、その「三王」の劇もよかつたが、一番印象に残り面白かつたのは、川島先生のふんぞろされたサンタクロースの出現である。まゆ毛がとれたひげがとれた身なりもよく喉にうまく面白かつた。



## 年末のさつどろ

四條の方に、出てみるとみんないそがしそろに活動している。四條通りをはじめ、河原町通、くれの日となると正月のものを買入人があふめる。そのさつどろにまじつて大女に入つてみた。だんぼ

うをしているので、中はあたまがい。一階、二階、人のいない所はない。まあ人の集まつているのはなんといつても正月の雑貨類の所ぞれから中年の人が子供の玩具を買つ所、正月のゲーム物のところ、地下ではいもようの食糧品用品がうれていいる。さすがにあいようはさむいのが、人はすくなくい。くればのぞくと云つて食堂へ入る人も多いようにあふる。大女もばんぎをはかつていいるようだ。ぞれから大女を出て錦通に行つた。こゝは商店の展覧会のような所である。肉屋、魚屋、八百屋、げち屋、等店を串いていはい寂けはない。だからこゝへ来るとなんでもかえるから、人はあつまる。あしもとも、見えないくわいだ。エプロンをはけたかいものかごの中には、ごぼろ、れんこん、くわい、紙に包んだのは魚でしよ。正月用のものがつまつていた。ぞろだ、もう二日正月、いそがしそろにみえるのもわりはない。道いへばいにつまつた人も歩みは早い。夕方になるとお歩みは早くなる。四條通りにネオンがつきはじめた。この雑とろの人もみなくくなるらうか。







# 洛星善戦空しく惜敗

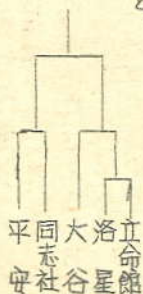
一年生にしては大出来

私立中学  
卓球大会

第四回京都府私立高等学校・中学校体育大会卓球の部は、十月十八日午前九時十五分より、同志社体育館で開催された。わが洛星中学校は一年生だけであつたが、巨豪立命館中学校の三年生と、しのぎを削り善戦した。かつたが残念ながら惜敗した。

◇ この日の天候はあまりおもしろくなく灰色の雲が空をあい、体育館のガラスのやぶれからは、ひえいあらしがえんりよなく吹きこみ、火の気のない体育館はともさむく、コンディションはあまりよくないが、

◇ さて中学校の部の組合せを見ると、



右の如く組合せで、洛星中学校は優勝戦に出るには一番不利で、おまけに「相手は三年生だ。こつちは一年生だ」という劣等感があつて、初めから受分的にまけてあり相当の苦戦が思はれる。

◇ やがて九時二〇分、いよいよ試合開始。洛星中学校は一番はしのピンポン台で立命館中学校と対戦。洛星は吉川君、立命館は奥

村君が先発。奥村君は一ホ八〇豊かな大男で、吉川君が体で圧迫されているような感じがする。まず吉川君四・〇をとられる。その後も六・二、十・二と吉川君善戦、十三・五、十五・五とそのままおしきられセット

◇ 吉川君、奥村君の二度目の試合。吉川君はすべり出し好調で五・一、七・三と相手をリード、しかし奥村君もちなをして七・六、七・九と接戦、吉川君よく戦つて十七・十八まで行つたが、おしくもやぶれ、第一回戦は黒星。

◇ つづく第二回戦、洛星猪口君、立命館小西君の対戦。猪口君調子よく三・三、四・三、七・六、九・七と大接戦。しかし後半小西君は十七・十と大きくリード、猪口君追撃はあらずセット。

◇ 小西君、猪口君の二度目の試合。五・三、七・六と接戦、猪口君はなかなか好調で十三・十一、

十八・十五、二十・十七とよくがんばつたが、おしくもやぶれ、ついに二回戦も黒星。

◇ 第三回戦ダブルス。洛星「私尾福泉組」、立命館奥村吉川組、二戦連敗で最後の望みはこの一戦である。しかし洛星軍不調で、四・〇、十四・六と大きくリードされ、二〇・十二でセット。

◇ いよいよ最後の試合。洛星はすべりだしはよかつたが、八・四、十二・六、二〇・七とぐんぐん差をあげられついにセット。これで三連敗でついに敗北した。

◇ まけたとは云つても、洛星軍はファイトもあり、とても三年対一年の試合とは思えなかつた。しかし「三年」とはとてども勝てない」と自信を失つたのは残念である。この調子だと三年の時はおそらく優勝すると思ふ。

## 新年懇談会

一月十五日の成人の日、本校講堂に於て父兄懇談会が開かれた。

この日、午後二時から本校講堂で、父兄の懇談会が開かれ、先ず父兄代表として、国分先生のご挨拶にはじまり、校長先生のお話、ナドウ先生のカトリック

の教育方針について詳しく説明があり、その後各クラスに分れA級は宮地先生、B級は押山先生、C級は佐々木先生を囲み、和やかな気分の中に、自己紹介などあつて、まことに有意義な話し合いがあり、最後に再び講堂に集合し、閉会のご挨拶があつた。尚、今後月に一回この親睦会を開かれることになり、その日を楽しくに四時半頃散会した。



東及び西玄関は最も出入りが激しく、今までも掃除当番を困らせていたが特に近頃地面がぬかるんでいるので靴にドロを付けたまゝ入つてくるものが非常に多く、又おそくまでピンポンをして校舎に入入する者が多く、いつまでたつても掃除にケリがつかず、どうしたらいいだろうかと当番達は愚喝をあげている。

## 雑記



僕は今もう三学期があと二日とせまつたので冬休みの題題の図画を



書いた。

今年はすこし變つた所を書いて  
見よつと思つて台所のすみにおけ  
てあるミシンと天井からぶらさげ  
てあるかんを書いた。書いてみる  
となかなかむづかしい。むづかし  
いのは僕の辛抱強さがたりないの  
かへこれはたぶん僕の辛抱強さが  
たりないからだと思つてしつない  
がすぐ手をひきたくなる。僕はす  
こし書いては横にあげてある本を  
よみしばやくしてねえさんにしか  
られて又書きしているうちに、夜  
になつてしまつた。今日はそま  
でにして又明日にすることにした。  
あくる朝は冬休みは今日一日で  
しまひなので、まじめにしようと思  
つたがなかなか書ききれない。又昨  
日のように書いてあるうちに  
ねえさんやお母さんがミシンが上  
手だとかがうまいとかほめてく  
れる。僕はうれしくなつていくら  
どの筆がすべる。だから始めの方  
にかいた所は下手であるが、あと  
で書いた所はわりあいにもうまくか  
けたよりの愛がある。

ふと僕はねえさんたちがうまい  
と云つた意味がわからないうちは  
気がした。いつもなら僕をけなす  
おさんたちだのに、よく考えて

見るとそれは僕に絵をかいたため  
だと云ふことに気がついた。うま  
いうまいと云うと屁んをいくらで  
も書く。それを利用したのだ。む  
づかしい言葉でいふと自尊心をう  
まく利用したのだ。

僕は新聞の泉橋をかくことにな  
つた。僕はなかなかうまくかへ  
と思つてお母さんやねえさんに見  
せると、これは何のことだかわか  
らないと云われた。僕はさつぱり  
くさつてしまつた。あと書く数も  
しなくなつた。すなわち自尊心を  
きづつけられたのである。そのた  
め僕は八日の日までに作文をだす  
ことができなかった。

僕はその日ややくそになつてね  
まへはいつてねえさんと思つてい  
ると云ふ考へつた。それは自尊心  
と云ふことについてであつた。こ  
れはあつてよいものか悪いものか  
例へば僕の場合であれば、四画を  
書いた時は自尊心のためうまくな  
け、作文の時は自尊心のためか  
けなかつた。それならばあつた方  
がよいと思へるし、ない方がよ  
いと思へる。僕はわからなくな  
つた。同じ一つの心のゆきだが、良  
い結果になり又悪い結果になる。  
が良く考えてみるとこれはある方

がよいのだ。これが全然なかつた  
としたら人は向上しないだろう。  
自尊心を働けられた時はまい  
てしまわないで、何くそと自分を  
ふるい立てたのよりのだ。

ある午後の 一年B組

ちよつとした 佐竹 宏文  
大きな出来事

外で遊びつかれて帰つて来たば  
くは、ガラスごしに家の中をのぞ  
くと冬の太陽を二ばいに受けた四  
畳半の部屋で火鉢のそばで何がを  
なぶつて遊んでゐる妹に気がつい  
た。その時は何も気にならなかつ  
たが、溜子を置いてそこえいつて  
みると、赤い小さなネジ自動車  
置いてあつた。手にとりネジをま  
き走らせるとなかなかよく走つたの  
で少し面白くなり幾度も幾度も走  
らせた。幾度目だつたかネジを  
まくと「ガガ」と音がして前にも  
後にも動がなくなつてしまつた。  
あまりなぶつたのでネジが切れた  
らしい。こしまつたと思つては  
おどろとしたがどうにもならぬ。  
するとカタカタと大きなゲタの音  
をさして妹がかけこめるのが見え  
たので、僕はすぐ云のところに自  
動車を置き自分の部屋へ消えてし

まつた。寂にとびこんで来た妹は  
すぐ火鉢の横にゐてある自動車  
を取り上げてネジをまきこつた  
がどうにもならぬ。すると僕の部  
屋に入つて来て「お兄ちゃんこれ  
なぶつてへんか、動かんようにな  
つてもうた」と云つた。「そん  
なもん知るか、お前もこへあとい  
いたんや」と、いかにも知らない  
ように云ひ、そしてすぐ「お前が  
先にうんとなぶつてもうぶれてい  
たのちがぶか」とつけたした。  
「何んにもしてへんかつた」と妹は  
云う。あつたから帰つて来た母  
に妹が云う前に僕は先に云つたよ  
うなことを云つた。母は「それは  
治子が大切に扱わなかつたから  
たのよ。今度かめもつと大切に  
扱い」と云つた。しばらくして母  
が台所に行つたのでふすまの向か  
ひのそと、妹はまだつぶれた自  
動車を持つて生つていた。僕はこ  
れを見て、あゝ可愛さうな事をした  
と思つた。自分に、自分のおもちゃを  
つぶされた。その罪をきせられた悲しいやうい  
が僕にはつきりわかつた。そして自分が  
悪いと知り、やうに事が悪くなり妹に  
すまないと思つた。今さら自分がし  
たと云ふのはやばいので、「おいそれわ  
が買つたわな」と云つた。